



石川医報の「読者からの声」は、会員がいろいろな意見を交換する場です。
ぜひ、皆様からのご意見、ご投稿をお待ちしております。
(編集部より)

女性医師の窓

「私の憧れ」

森田医院 山下 陽子

数日前の新聞に、医師国家試験の合格発表の記事が載っていました。毎年この記事をみると、臨床研修をしていた医局のパソコンで、ドキドキしながら自分の受験番号を探したことを思い出します。平成16年に富山医科薬科大学（現富山大学医学部）を卒業し、あっという間に15年が経過しました。私は今、小児科の開業医をしています。

小児科になろうと決めたのは大学5年生の病院実習の時でした。それまでは全くと言っていいほど小児科に興味がなかった私が病院実習で出会ったのは、忙しい仕事の合間に時間をみつけては病棟に足を運び、長期入院の女の子たちとおしゃべりをしている女性医師でした。その先生に四六時中ついてまわり、毎日その子たちと過ごしているうちに、私は子どもたちから「ハイジ」というあだ名をつけられました。ちょうどその頃、女の子たちは「アルプスの少女ハイジ」の絵本にはまっていて、私がショートカットにちょっとパーマがかかったハイジそっくりの「くるんくるん」の髪型をしていたからです。そして、「いつも元気に笑っているから。」と言われました。特に「子ども好き」ではなかった私でしたが、なぜかその言葉が心にグサッと刺さり、今でもその病室の明るいキラキラ光が差し込んだ光景が忘れられません。そして、その光景の中で、実はいつも一番元気に明るく笑っていた女性医師こそが「私の憧れ」となり、私の小児科医としての道がはじまりました。

無事に国家試験に合格した私は、初期研修2年を経て、小児科1年目のある市中病院で過ごしました。そこは軽症から重症まで地域全体の子どものが集まってくる病院でした。1人主治医制で、自分が外来や当直帯で入院とした症例はすべて自分1人で担当しなければなりません。当直をしていたある日、ICU管理が必要な患者さんが運ばれてきました。私はどうしていいのかわからず、3才年上の先輩医師に助けを求めました。そして、その日からICUに住み込みました。数時間単位で変化する病態を理解するには、患者に張り付くしかないと思ったからです。すると、なんと私が助けを求めた先輩医師も一緒にICUに住み始めました。初めて自分の責任で重症患者を担当した私は、薬剤の量を増やすかどうか、補液速度を増やすかどうか、その選択の一つ一つに悩みました。そして治療方針で大きな選択をしなければならない時はその重圧に押しつぶされそうになりました。そんな時、先輩医師はとことん私とディスカッションをしました。そして「その子のために真剣に考えてだした結論なら、全力でやりきれ!」と、患者と病気に「最後まで真剣に全力で立ち向かう姿勢」を教えてくださいました。「医者として、小児科医としてこれからどう闘っていくのか?」。その先輩医師の熱い姿勢が「私の憧れ」となり、私の小児科医としての「熱い闘い」がはじまりました。

開業医になって4年が経ちました。まだまだ開業医初心者の私は、こんなにも毎日いろいろな訴えをもった子どもや保護者が受診するのかと、笑顔を忘れ、心が折れそうになる日もあります。でも、やっぱり「元気に笑って」「熱く闘って」小児科の女性医師としての道を歩んでいきたいと思います。